芭蕉翁俳諧集　下

中村俊定文庫
文庫 18
529
2

宮城県図書館蔵

芭蕉翁俳句集巻下

名月やうつくしき人の寝る顔　あし

一分てもなさき梨子の切口

玉味噌の位法よりる秋の風

什宿をとめいて寄る鉢叩

芋田うゑ稲うて夕ぐちの風

年月多るを変らぬ場

糸竹といへと盗ものうし

俊定蔵

中村俊定文庫

ふるつと朝日よりむらの様を
日々人通り絶ず賑ふ家多
新宮町のうちの鄙古紙
西高九里下りて八洞くみ
塗りさ名ゆう物の如く入
又河内のセッ紀の茶碗よ
むさうれと名付けたり
小俣乃うせよりはらうへる

やうく〜と矢洞の河原九歩ばかり
豆茶の条もうゑぬ点として
秋ちの咲い桜の咲きかゝり
こゝ所まで書き豆瓶の寿
蘭九花の名除よ咲そめて
かゝ白も病人あまゝかさぬ
ちく咲くも出る餐ゆい
冬の緑よ拾おりまして

春さへ（ともよさへ）（ともよさの）（り人人
田嵐の稲さへつかさて月冴て
風ふ（そむる　年のよ　始
ふるさと人の何よ　茶屋さ
神風や吹起さまてかい見ぬ
いさとひもおさ（名雪よ）（月う
ん　をこのくす　拍うち　秋
仏（ブト）物ふり　拝ふ　もの　杉の

又月さ小袖のうさを脱あ（ふ
血をそさうよ縄　元老さ
手　ふ　日　結　ほ　むる
彼　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ
宮　て　ふ　ひ　の　い　鈴
城　小　の　宮　ぬ　て
ふ　て　火　吹　つ　妻
五　木　ふ　（百　苔　の　小屋

生うよめと分とやまうせん物おりし
水のいきやよ仏さみて
麦畑を流汐の通陽の樊うり
鶯入よ菜蕎もそれう名と留て
恋りし古風の繻子奥飯
飛火おうしうそ川繻の
什里うそうはうく昔布袴
形ふ一八法会を寄物そし

丸うう渡き きうぬ多等
富のふを面とき法芭風
うのふ品よと法世よまうて
元結のかつをてうは衣うはさ
人の情とはくぬよ紫うく
陀鉢さうを本旨の猿丸実
月の都亭をさうはき指出よ
夜人の寄ぬを紫ふうかつきて

為ゝ〳〵く佐よ分をうゆる俗
茶をきかしらを授る吉柳
花ゆをを靜う華を形尺まて
陸奥て解ゝの引ゝの美面ゝ
授ゝく出ハゝ陸華の引ゝる
ヤさし紀多ゝ咲る授る
四ツ打の一蒲堂よ表うゆく春て
花吉の家ゝ尺ゝるゝるの下

揚句

細ゝ井一溝を乃母る美鉢
のゝ口なゝを伊丹法白
琉球り世云ゆおゝてゝ
尺ゝまゝてを分ゝ本美ゝ
妬入ゝるゝりゝや明ゝ引
茶赤紀百不れの門ゝ
公事ゝ頁ゝる茶云北坊方
干地佐ゝや陸精をの朔

ゑ掛のまさきをいとはのり
鶴細工ス場と書の蘇生ま
編笠組ゑ入れを何ゆへ
乃こさ手枝の〻る草細
紙代ろう付意ゑふ秋の風
ゑ絶りの酒乃幸も身ゑ乃
月もと〻育とんぬ好る馬の市
物意をきぬさのゆゑ手くまて

京おさう形名を表ハきこにや
流まこゑ子ける面ゑの札
戸ゑ京那紙ゑする注連の内
ゑ駅疲てや京ゑ明ほうん
ほう物おりし浮世一人
け意といんとすれハ此ます
手れてこゑる中の戸代出簾
火と結て岩の洞も冬こり

ふもとに生ふ　殘を順礼
折ふしのせる茅の初りの
入ゐてあまりよ壁代紀の奥
瓢箪の大さ又石ゝ生ふ
風ふ〳〵ふうまつて〳〵る市人
何事も安ゐ元利の地
醫の多きこと用ゐる引蓬
いそがしく師走の定ゝ立出く

ふゝ世話やくるの話元
叶里ゝ古紀玄蕃の名を傳へ
足跡ゝのせぬ面のあけ分れ
さぬ〳〵やはりうはそくなてやうに
風ひき声のうゝ
ゑもつゝ蓬の古結もそ〳〵さぬ
拘いそくさ紀拡張ちをゝ
月と花吉の言根を小ゝて

破まき戸の打寄る麦の末
凡世とそ淋しさ麦の換り
乱るくて服紗に包む十寸鏡
ものおりしい居る神ゐの拍いし
人去ていまる浄瑠の白ひ書る
初秋の山ひ堂九作隅
かくさす嵐のひまる家中に
垣穂のちけ家ハ屋まくく

ひやくに炊ふ妹ゝ夕から晩
あれ雲き逢カ用つくむそ
月月のうハ九穴まて浴さうに
祐もをく鞠に祐ふ
秋の田を刈せぬ事のもりて
さいくかこゝ文字同に書る
いろめしう尾庇の末葉屋
地を寸まるれ癒て甲斐なき

花の比後義まいとも義一

揚句 田ましとろろ腥ひヤ

何事も云の酒ハ志ひ久之

里人く初て年の貝ふく

美蓉乃花共ちるとちる

吸物を先お来されすい芭蕉

さし木はさる月の縁取

苔かの花又蓋法を秀句

火とりて又蓋れたの雪蓋れち

行くさきすゝ高帽仕義うり

陳をうて車ゑきこむ

うさ人を根敷姫よりくらせん

芭天又月出ハ紅ゆけ

湖水乃秋の比衣代初哀

布子呂ふ風の名れ

押合て赤てハ又さけのうり扶

茅ぬきよ桂こハうの水百首

蔭の茅とふり灯ぶりけて

能しの光の七尾ハ色ハ信うき

奥の費志りるを乃老と尺て

立うこと屏風を信て女子も

湯屋ハ竹の簀のよ信しき

信やく寒くるこうるう

猫ひきの猫と世と弱る秋ハ月

又ハ六本生木つけるミツダケ

足袋ふとよこす馬かこの乃

てのちう蔭ふ水こ向うう

戸信ふも延らこひの奏屋奏

志そうと茅鞋と俳月歩さ

蓑とふるひよ紀そう秋

ゆのうて蓋のひりぬま桂

茅屋よ昭君ハ手やう

さびしくよゝ所うりうる意をて
俗世の累をうる小所なり
ふ茂立とゝれて廣き板敷
庭のゝうゝ風這する花の陰
夕めかゝかゆすこくへて風薫る
桂乃口やをかいて氣味よき
遠せハしき反りの奔
金殿と人なる身のやすき

何とゝるゝも考えりゝり
花とち陰ハ西会ゝ夜景を
考えれあまるる小庵
旅の池をにを的一意
何おりし牡丹のるく
夕月秋景の蓋根乃西廊ゝ
拙ゝり四のまやさていられよさ
加茂の社をよさ社なり

面白やとりわけ近江迄来
至眠るまぶたの月のさやさよ
片隅より出て蓋をあて
二階の客もたまらぬ秋
稲の業延乃力なさ風
爰人乃をもめよ誠る於廉忠
数向つくる松ゝ下さ
鞠垂仕之業的よ秋の来く

入迎よ近江の涌湯の名百首
中もせいのうるさ忠ふ
細き角より点はの上侍
掛おりふ才よ掛哈(と世つれて
秋風の松をこハる信の言
居ゆくうるやゝ白よ美まれ
巡礼死ぬ乃の湯を
何ものも妹れ秋を衰ちる

花ふるといとゞ侘うさちる
熊野尼さねと法師ひろう
酒てゝ元うるあさ酒うるうん
刀六の月を取くを蔵うゝ
中くよ古間よ居れハ餐もち
家名を里のなゆりうの之
月和くよ此ゝ原月
花落あちちるけハうゝ拾く

一夫の後むりうと五ゝう
醫者の業を欲ぬゝ別
乱ゝ行うゝを証歌寺来る
山伏とうとてうけう国の前
案内ゝ和尚ハ礼よある高
見てゝい見ゝはるゝ月大ゝ
延行前よ餘さけゆく
ふ野立ッ池飯鮒の右北木綿市

おぼるるそんの花はさうさて
梶の葉をる藤之弁の子
むらゝ咲り地蔵住する
きぬゝきぬの踊は笛を
ふうけの地打をめを朝おろ
はさしゝくる星川の橋
塚のゝゝひの岩る石原
古も僧の作よりあの去の来

胡蝶寺之宿ゝうたる蔓の花
よごれ絹よりる袁は形
月は歌之餐を拾之様出し
火とりして拾あてふる伏さち
今ゝやゝ草枕織と点連之
生物の絵之待も隠まゝ
ロハ赤うなる二月朝ロ
初花て伊勢の帆乃さまこそめて

みちうさとて六田の柳の枝を折て
掛菜 芋めく手大豆の汁
見えよ由さとて秋色堂の書
咲そめて無ふたよりも稽古人
くえ笑こる つ芋の板
法刹の拍黄て吟く青北月
さし汐の門の松よ手寄く
宗鉄あくれて 墨ゝ入虹

鶯花の雲を言よ手折きて
もの吟ふうちの蜘蛛くるき
稀ものとくくやぶきり
るの芋倩紫堂のくりに
乃ゝ折き八宗よ寄て紀の笠
牧織勝一く 芋乃 糸 文
首乃元を 歌 歌の露
初言ゝ先下の白と出しゝ

孫る時も到さて安さ鶴の書
風雅仕上　酒呑の書る
僧の餞する盃九々くれ
女市花るまえくさりと落葉て
月又歩行　旅の碧水
さ肉〳〵の貝ゐらゝ衣布俳
豆腐ひく書さ哭ぬ墨の花
香の栄りと仕ゑて信ゑて信

此て名を書さ名と書さる
身書てたのむ春の筆麿
業るつう〳〵人よ仕て
田を賞て俺ちもあき春つ
寺雑て志やゝと送表知ゑけ
麦もかゞけてひとりのまし
共ちろ〳〵と脊中寺る
寺時〳〵いそれぬ人とおりし差

ゆふまくれ烟霞かすみて立ぬ
泥うちかけてよる女のされ
言の八潮ふ哉あしたの
陰奥ちそ紀ゆ月光ゆ
越中八幡をと宮ゆ新出て
麻疹ちてる物のやさよ
畑の中ゆ蕎麦稲畑
井戸ゆ無遠慮ちゆ月秋

おとこうしろ影ゆ呼て通り行
畑中ゆ　おろちちや桶
梓弓の羽化家とかたうせて
彩書をよめ哉　暁のしら
笠ゆ濁をとる芦のうら枯
梅ゆ出ゆ初春や芳野ハ花の時
ゆく雛をいさゆ哉のうつらく
ゆく元　琴丸繚や　おりいき

麻の吉後ろ糸せぬ宮
冠とも家ともこうよ住吉殿
見のくよ業種ハ孫て歌舞
業と黄て旦ち伯耆の学寮
歌仕度と為やせう新
秋の面宮の方よてなくさん
ゑるこよ為と揚る第戸梅
山吉はれとうち比ち川うく

アぬ子の主人ゑ為とちこ
きぐく出ちかくて傘
そく穴ゐるきトハよ
老ら原吉出屋より外ハこ原
松山の縁き鄉踊の咲渡り
結炉の炭をトて門ぬ
ふを因相て洗ふ伯ゑ
掛ち為ゑ為のうろと持をハや

目出たき事に先ず不二にて申て
さいなるくりよ 祝おさゆる
那智の山丸まる生る宮
ちたしめをくり立るむさこも
華足袋貸よ地蔵話さき秋の雨
伏見ひさうれ古屋の月
墨れと拾ひのすゝ足
うしろ書ても妙ふ筆の功

ちと矣もまるいけよ絡まつき
白髮さし出て屋のひくせめ
出陳へ菊ゑ爭めいちくさ
姫を望う人よあらせぬ
紫宮函の回ひ清る細巻を
去ちはハ百乃ふうぬ六月
祝けさる味噌汁よ書何屋
公さといしい出て出巻の事

絶宵尼の病を押へ寄
たまやくとうち鳴る名月
初しぐるる素掛下地炭てんる
寒殘 おるる五合一ぬる
町京の清夏と碎て紀の張
門ゝ 押掃 壬生の念佛
大ち風ゝ 墨のいきれと吹過し
光ゝ 春雨ゝ 脇ゝ

江戸のたたむうしの亭を登りまて
こちもいまとかう向と賀
方ゝ ふ十軒の内北隣乃書
桐の木るく月さむる
門出めて生涯つて孫ゝ西白さ
拾さ金ゝ表ゝ
初年ゝ女房北新ゝ振舞ゝ
まゝ 出ゝ 所ぬ信人

法下の陽治を送る花さう
ごの春も東の方より来とあけ
奥ゝ哈あく濱の雑水
ふ多嘗一歩くるうなる
赤を丸るの果ぬ寡羽
蒲（も）さ（ま）せん嫁と連て来て
屋風の陰より見る菓る盃
妹とよい而うゝをゝハまく

信如さ（ま）ゝ先ゝをやる
家の病さを見よゆく
鮫けさういをのようよくうて
宮の紅吹をうしる終月
ふゝんをけて初おりし花る
ゝ（ま）ゝ（ち）坊主戒上へ行うゝせ
法子丸そうに出来し歳ちふに
今の習よ宮のつさを行て見る

手貢無さとかめるまるう
恋は思ふまぬ七夕の照
る月の百合せるさ芋さけ
晩のうゝ〳〵ゝ者さ〳〵
花見ると女ろうう連立て
如拍の隙を除さぬ秋の風
割水の安さ玉巻霧しも
うハ垂乃干菜さむもうハの見

馬ゝ出ぬ日を内て立ちる
塚ゝ門行ゝ十五夜
叶浦の除鬼ゝと猶ゝ月と花
川城の常ゝ水とあゝうゝ
平地乃寄れうさ籔垣
造出さ暮の苞ほゝこ
墓用ゝ俗世と立て京住居
中よゝて情業合の借ゝし

蛍我くもいて森せぬ夕月

鯉の跳るは紙をむらゆる

ちらちらと菜の揚場の人戻り

さのつるは和るほる月の夕

物脊うれて肌寒うなる

孫ら泣る祖父の借衣

紙指るよりてゆる蛍刀

毋の袂に小詰埋て物ろさ

あさ涼うしるて門の書舟

やれと呼出を京丸乃連

ろあけるおくるるのをてあひて

も拾る小峯の仲百そ川くと

くりくりと定丸晴る春さ

柳丸角乃をてぬ黄元

涼出しの半る俵をそふ

むきて春を栗も板もむくの声

住僧なし　数寄者の　紅
まふさる　星乃　[illegible]
引立てもりか　森なる　たとやさ
至ちはひ　一筋て　出切　鶴の奥
至森の　癖を　なとそ　[illegible]
中ほよりの　状　古　古
鶏ものは　とそ　ゆ　振　森
氣さん　形　書　葉の　比　枝　楓

山　門　ある　なけ　の　月
多　際　ひる　涙　の　小　い
足て　通る　紀　三井　八　花　の　咲　て　里
ち　ち　風　北　又　西　よ　な　り　北　よ　り
さ　う　に　孤　と　た　ま　う　る　る
喧　嘩　の　所　は　も　む　さ　と　せ　る　る
大　ち　れ　れ　ま　ら　こ　ま　る　る　の　種
書　ほ　と　の　家　け　八　皆　出　家　而

奥の世益を多の紙
赤鯨紙を座の正面
宮ゝぬ娘のそろえ出め
多の筆とおこを杉の風
大工つゝひの奥よりこゆる
米橋もろ八よりて海るく
ゝ方て市の中を押合
月新の雪もをする雪の夜

志満ゝ蔵を分かるゝ
雪てエ夫をきる恋
とまりゐ家よ海を格の蟲
馬京を張ひ初る月の新
尾張ゝ法ゝ元の名ゝる
敷うゝ村ゝぬける喜乃
哈蔥ぬ鶯も闇もにきいて
毎芭を格ゝ法ゝる後第

顔さいはぐる和月殿の来
ふ（のふと毎（歌る
対身しを毎第る月のれ
ふの含まる時肌をき
春色の同も若歌伯
くゝと書る拍と呼ぶやる
尾うよりは法歌幾能
餐とやして尺遠る歌

産業まはり灯つける業の月
機織さぬハ角力元乃常
歌なけの星北きひとりを
所供ふ常陸仮も花そ乃
白いはしふ紅の花八
長紙とうして人の名とふ
本結う出ることくしと呼
金と器して銭と使を亜

松風のずんぐりこうぐわを
捨るゝあること 岩の門 蟲
る一さを 篇を 敲ける
小湖市の湖うゝ 花る 生公人
病うゝ ゆけもて 如房 沈うゝ
あ此 板うゝ 板板うゝ 生うゝ
この 花 光うゝ 生 合屋 風
面も 行うけてゐんの 勢は

松風 毎ふ 庭の 立琴
兜の 絃 笑ふ 人 ゆむ 生 生て
さ面ゝ ゆ 意の 馬刀 貝 忘 貝
乞 合と 朱て 蹄 脊 かさらふ
喧嘩の 中 とむ ゆ 月の け
仕合と 矣 橋の 毎 とのゝ ゐんさ
せゝゝと なくふ と 経 ゆ つ 生 元て
大工屋 根や の ゆる 著 色

一里の私事紙のきさゝる
山き皆みゝんの条の黄ゝるりて
先度の風ゝ人死ゝたる
水くさきゝゝゝるの粥喰ゝ
明ゝ今ハすゝよるかハせ根
加減の茶ゝりゝとのむ
上とゝ茶てそゝらとさゝゝ墓茶
ゝ桶と入る清亜の記

遠ゝゝゝゝゝ記憶の未れ家
月花ゝ小き門と出ッ入ッ
阿弥ゝ眠気ゝ醫者の供
影茶のゝされゝりて来る
落雷れ一度ゝ降ゝゝ
清茶ゝゝゝんと次の田乐
ゝ拭絞ゝおろす半の荷
門死ゝ後てちむきゝ明り

方々へ醫者と引き籠れ月
踊の仕法注もれ思ふ人
盆さへ出て行うるれ著作て
かしこの法をもて菊とやうう
蓋生をよ意地やめる男ふり
浪のふさでれうゆき菊風
丹波うう仕もなくて帰寓
苦雪うう嘉れと利とさへぬ

言よ出て古笠賣と追ちり
只原中よ月をさえ上者
神明の知りうとして仏法もなき
志やくまうやうて気う強うなる
奥の院とりく花をさし駅記
去のよ產屋の仏法つくりと
うりく〜や湯漬うんん
いそかく皆股立を直し

目つゝしのゝ慶隆こ
かゝひる藤林より日うくれて
佛の水地と色むゝ糸ぎゝ
こゝろゝと白拔出せはゝゝ
ゝゝゝゝよ第九くゝ竹緑
根こゝの赤ゝるゝよ和おし
そゝい時ゝゝ神ゝゝゝ
鶯とゝぬゝゝけゝの月

留まあるまゝてゝくゝゝゝ花
日光へんかゝゝゝ秋の比
くゝくゝゝのむ身九ゝ
ゝゝこの世よ蒲生氏郷も故ゝ
花のあるゝちハ世ゝとゝゝ
菊くれゝゝゝ恵谷の石
ゝゝさゝよ業九ゝを吹立て
石町ゝゝは左緑ゝの接

よしくせともけぬ小鰐
肌さむさ蓴の朝菜呑あひて
陰演よふ清きくぬる音九月
寄紙よなすまし　ものいきうひ
ちさきく家のくさき祈る初
花よ森ん一寒き表の〳〵
竹橋のうちよりかをむ嵐元
馬の糞無かく役もいそが〳〵

こハぬもう張〳〵蜘くの吊
桜ちよ茅ふれと打ち乞ひす海
秋あそひ九ふけて家とる坊を先
百里ちの海　毋九きぬく
よりもそ笹ぬ中ち生蕊
ちさ〳〵て紅よ金ちさ月のくれ
楷神よ楷く久つく庭幸子
蔭子このさぬる蓋の〳〵の毋

考えくよ世間りの花さう
百姓やもむ苗出後の陳
代一苗も乗乃出る貢
七十又なる歳より後こふ助技拍
之天通り裏のさしうけ
涼しさハ堅田の出湾よくあて
帆とる牛九方耙やすむる
墨漆よるの男のうろ入

ちはよ底る蔭のくさひ通
押潜る師走の口を哈うまて
尾又尾を舟く咄を飯
田の中よ掘せぬ石の通り
芝ちつく月鏡なる
花乃対祖父ハめて度ちまた
廣庭よ書の詰漆を引ちり
這よ引るよ此ようこを居不

喜あハせ拍鞨のくるる数の屏
蝦の沢といふむ喜先
遠よりて水ハ是怪ハ近のし
泣くく泡のむ祭をめく前
ゝくくと板よ風のなる書
稲盗人の縄と紐やる
月ハ出きて新よふ星の出来ん
出ほきて寄ハとくりやう

仮よ剃ハあさ夜くりハ弦絃きて
仕舞くく戻を舞方の喜
田と植苗数白をにの稲ハ出来
風ハやうよきれくの雲
朋雲よ角力の歩ハいくりき
葉云さ〻初嵐くりハ南無大蓋
夏ゆうさ去ます育色の赤風
刷ハやく雲〻老乃紅喜

願軍功者を引てう（るり
足をして懈（這入る月の皮
唐の粽を銭もてる小男廉
ひくてうに綿をもせん弱法師
古醫者をもに伽羅立彩
桃灯足ゆる所の入口
女房よふ茶屋の亭を為やきて
夏衣ぞ関の孫太ぬきもる

ものかさ風の石菖（来る
江湖牧斎北田令藤尺
もんふうと表を入月の多羽縄を
粽をもちはをうの菖の嘉おも
をんすとをひる男足歩
一度ハ戸をもさる小商ひ
出る洗くんて神の門茅
蔭もくまるむくるれ声

鉾仕ととくしる初霞
屋敷の緑丸葦も数やふり
互の隙ゝ戯かきつけよ笠
蘭と月おけて門よ忘る
切麦てなちゝ去ゝ〳〵時雨なふ
うそ寒云蓑共打よ結ひけ
袖よかかくる茶餐の寒
かんくとるけ寒き雲 拾

樗拾ひけく ふも又くは
ちいさ記載共者るこよさ
あさふひも沙りと内のたさ陶て
秋来ても畑の古共刈まれて
雲者のねろを之拾ふ云
清しる俵とさうをらケれ
屋の酒瓶てうゝ破ろかつきて
俗拾ふ音とけよ切入ま

凡世よりの奥ふかく入り込
むのうち来る人よりのい
開しう一向揺ぶり使ふ度
抱のうく松山度なるあけよ
ひふ人うに奥くさ紀うり
此次の上下乃流れ度うく
衝よ枝うさす箱の気ちうし
ふ別ふうよ点を志うふ

蓋生よれうをうけはく伏凡級
吸ふて社数の客を立せうる
把後のお場を又少て来い
除ふ法ふを言みうをの一志きり
ふ点ふうふいて粉細工をる
何の第しおうも志きぬ大さ
嵜ゝて此のうりる喧嘩法法
八敷の礼ハそうく仕巳りう

紅葉の鮒乃時ふられる
足袋ぬいでかるて豆の湯を
手取よちいされやれら供させて
行燈のよるを白女歌つき
夢ゆめ琵琶とられると亜
嫁とむをめるる口説おく
岩吉皆さむくてこぞる火燵の君
餐徒ゆゑ書よ出るの紅月秋

木よ十そのう柿とをるむ
首よをのとかるる掃除い
花咲ゆく業はを初る書の山
寒鴉居さうよ袴見るなり
燭臺は小紀家よこうやて
角力よ面けて云事ゆ
山ゆけハ山伏むゆ一ゥ向へ
樊さゆて案ゆよゆく居の花

出うさ さうす 吉乃 風 命
むうしのかゝれたる 血の乃
一 弟 吉 代 をうて 嘉ぬ 伯乃 物
融の こゝ 孔 桃りと の 先
幕 木ハ はうぬ ゑゝて 義るなり
ゑ りゝゝ 嵯ゑ 体む 代 士
哀 芸ゝく 結する ゑ乃 吉 ゆうう
大八の 毎りゝる 後 小 海

作 先の 歳り 編 望 ゑ 呂 氏
鄭 記 ゑり 孫 金の 浦
大 ゑ乃 ゑゝて 田 ゑ 畑 ゑ
之 ゑゝ 舞 年 て 亜 乃 世の 得
残 物 ゑ ゑゝく 祖 母の 伝 ゑ
ゑゝ ひの ゑ ゑ ゑ 誉 ゑ 偽
ゑ 柘の 九 ゑ 毎 物 む 嘉 慶 ひ
百 う 伯 ま は 又 乃 ゑゝ ゑ 絵の 横 柘

ともうて逢坂乃板
出ぬちうけ逢坂れあ事不の
燥萱茂目利のうちよ行舟て
逢坂の布袋乃歌よ月指て
百乃やいとよ紀貫之ゆ
かち義ハ舟と先何なる
英俊山ちのうゝ義の咲搔い
英俊の義乃中れ大うゝ

ゆゝの小紙宣も宗よ下貫
業義の屏風よ絵ゝ狩（カリ）
れのうけよ中かゝる宗うちと
義よけさゝ中英趙の紋
るとのゝう侍歌家とゝそいて
物衣よ下紀貫ゝとかゝ舟
幕とちうれを昭象とる
恒義よちちと盥の礼いて

書付のうちハ小屋て火と焚
彼屋敷ぬくさ見てうさぎ
生芝をさくるくるくるくるくるくる高砂の花
上下の橋の蔦る川の名
うゝ田出来中を踏のさつく
枝一本を為のうさぎ
無駄のうるるる神のぬくさまて
芭蕉翁附合集巻下終

安永五年申季秋

京都堀川錦上ル
西村市郎右衛門

大坂心斎橋筋順慶町
澁川與左衛門

江戸本町三丁目
西村源六梓